

# 植民地空間満州における日本人と他民族

——競馬場の存在を素材として——

山崎有恒

## はじめに

かつて日本の植民地であった満州。敗戦と共に満州を離れて日本に帰国した人々にとって、その地で過ごした日々は決して忘れられない深い意味を持っていたようである。戦後日本の廃墟の中で、必死で働き、結婚して子供を育て、混乱の時代を生き抜き、そして定年退職を迎えた彼らの多くは、かつて自分が幼少期や青春期を過ごした満州にもう一度行ってみたいと考える。そして様々な形でセンチメンタル・ジャーニーが組まれる。

旅行先はかつて自分たちが過ごしていた街、住んでいた住宅、学んでいた学校、通っていた職場。日本の建築技術が優れていたため、当時の建物の多くは現在もそのままの状態に残され、もちろん今は別の用途に使用されているものの、当時の面影は十分に残されており、そうした建物を訪ね歩きながら、自分たちの思い出を重ね合わせ、人々は感涙にむせびつつ、ツアーを続けていく。こうした感動は、多くの文集、旅行記、そして最近はネットのブログなどの形で記録され、公開されている。

さすがに時代が平成に入ってからでは、そうした記憶を持つ人々が高齢化してきたこともあって、センチメンタル・ジャーニーは一時期ほど盛んではないと言われる。しかし例えば南満州鉄道の沿線主要都市に設けられていた旧満鉄経営大和ホテルなどが、現在でもあえてそのままの状態でも営業を続けている（というか、続けていられる）のは、そうした日本人のノスタルジーが今もそれなりの経済効果を生み出しているからに他ならない<sup>1)</sup>。

ところがこの現象を現地の人々から見るとまったく違った意味を持つ。敗戦と共にすべての権利権限を失い、この大地から駆逐された人々。その人々がなぜか旅行にやってくる、口々に懐かしいねとつぶやきながら、建物を訪ね歩く。それがホテルのように今も公共の施設として使用されているものならばともかく、個人の住居に「ちょっとだけ中を見せてくれないか？」と言葉遣いや態度は丁寧であるものの、侵入を試みたり、現在はどこかの会社のオフィスとして活発に使用されている建物に、用もないのに入り込んで、しばし感慨にふける、そして極めつけは、授業が行われている小学校に多くの老人が訪れ、教室の中に入ってきたりする…そんな光景はある意味で違法で、ある意味で傍若無人で、かつて自分たちがこの国の人々にしてきたことを完全に忘れてしまったかのような実に無礼な行いにうつる。だから時として、このようなセンチメンタル・ジャーニーは、現地の人々を憤慨させることになる。

ここには大きな意識のずれが存在している。旅行しているご老人たちには深い罪の意識がない。いやもちろん自分たちが満人や朝鮮人たちを自分たちより低い存在だと見なしたり、職場で酷使したりした記憶が残っていないわけではない。しかし自分たちが思い出旅行をしている

こと自体が、現地の人に当時の屈辱的な思いをよみがえらせ、憤慨させているということにまでは思い至らない程度の罪の意識でしかない<sup>2)</sup>。

ここでは何も戦争責任問題について再提起を行おうとしているのではなく、またそうしたセンチメンタル・ジャーニーを糾弾しているわけでもない。ただこうした旅行を行う人々、すなわち戦前期に「満州」<sup>3)</sup>といわれる土地に移住し、そこで支配階層として君臨し、現地在住の他民族を支配していた人々が、そのことにより他民族の人々を傷つけたという意識を現在さほど強く抱いていない、という事実をセンチメンタル・ジャーニーの存在から明らかにしておきたいだけである。そうした意識が形成された原因には、もちろん戦後処理の中で15年戦争期に起きたすべての出来事が軍部の責任にされてしまったことや、日本人の満州移民をめぐる「語り」において満州開拓義勇軍の物語などに代表されるように、被害と犠牲の側面が強調されてきたこともあると思う。しかし私にはむしろ満州の地に彼らが暮らしていた時代の、現地における彼らと他民族との接触のあり方にそうした意識が形成されていったことの鍵があると思えてならない。

本稿の目的は、植民地空間「満州」における日本人と他民族の接触のあり方の検討を通じて、彼らの意識の中に存在しているある種の他民族への共感を明らかにすると共に、それがゆえに彼らの意識の中でノスタルジーが「罪意識」を上回ってしまうという現象を歴史的に解明することにある。

こうした研究は、日本人移民史研究の中では特殊な位置を占める。これまで日本人移民の研究はその大部分が移民先の社会でいかに差別され、いかに苦勞をしいられ、いかにしてそれを克服してきたかという視点で構築されてきた。そこに登場するマジョリティーの人々は、マイノリティーである日本人が歴史的に背負い続けた「痛み」に無頓着で無関心な人々であり、それを彼らマジョリティーに「理解」させるために、移民史研究が続けられてきたと言っても過言ではなからう。

では日本人がまったく逆の立場に立った時、そこで何が起きるのか？

## 1. オーラルヒストリーから浮かび上がるもの

本稿は筆者の専門である植民地競馬場の事例を通じて、日本人と他民族の関わり方について考察を行うことが主目的である。しかしながら、そうした研究をおこなう上で、筆者はその前提として当時現地にいた日本人の「意識」に関する研究を、オーラルヒストリーを通じて行うことが極めて重要であることに気がつき、現在鋭意そうした研究を進めている。

競馬という娯楽は当時の日本国内でも幅広い人々に親しまれていた大衆文化であった。したがって満州において、人々がそうした娯楽を求め、享受したのはごく当たり前のことであって、彼らの競馬に対する意識を検討する過程で、それが植民地で行われていることを特別な要因として付加する必要はないと当初私は考えていた。しかし哈爾濱（ハルビン）競馬場における事例を研究している内に、そこには内地とは大きく異なる、ある種の大前提が存在していること、しかしそこに集い、競馬を楽しむ人にとっては、そのあるはずの大前提がほとんど意識されていないか、ないしはまるで透明な壁のようにまったく見えていないかのいずれかであることに

気付かされてショックを受けた。

その大前提とは何か。それは競馬場という空間の中には日本人も満州人も露西亜人もいるということ。しかも彼らは単に観衆として、すなわちアウトサイダーとしてそこにいるだけでなく、騎手など競馬興業の担い手としても、その空間に参加していたということである。

これは当時の日本国内における競馬場の運営システムとは大きく異なる。日本国内の競馬は、現在とはまったく当時は純粋に日本人の手により作り上げられ、調教師も騎手もすべて日本人だけが携わってきた。もちろん競馬場の雑踏の中には日本人以外の観衆は存在していたが、彼らはあくまでアウトサイダーに過ぎなかった。

それに引き替え、満州競馬においては日本人以外の他民族が深く競馬に関わり、また白系露西亜人の女性騎手すら存在していた。内地では女性騎手の騎乗が全く認められていなかったことを考えると、これも大きな差異であった<sup>4)</sup>。これほどの大きな違いがあれば、それはもはや同種の娯楽とは言い難いことになる。にもかかわらず調べていくと当時現地にいた日本人の多くは、もちろん競馬という娯楽の特殊性はあるにせよ、そうした差異をさほど意識せずに受け止め、内地同様の娯楽として享受していたのである<sup>5)</sup>。

そのことから見えてくることがある。それは当時満州にいた日本人は、すでに自分たちの生活する空間の中に他民族——露西亜人や満州人——が存在していることについて、さほど嫌悪感や違和感を感じることなく受け止められるようになっていたのだろうかということである。哈爾濱競馬場は満州国国立競馬場であり、監督官庁は日本人が局長を務める産業部馬政局であった。したがって競馬場の運営権限は日本人の手に握られており、もし他民族の存在や関与が、日本人にとって支障となるのであれば、それを排除することは容易だっただろう。しかし実際にはそんなことは一切なされず、競馬場はまさしく満州国のスローガン通り、「五族共和」の空間として機能し、そこに集う誘客たちも、国籍の違いを超えて共に競馬という娯楽を楽しんでいた。そうした他民族とのニュートラルな関係はどのように築かれていったのだろうか？その問いへの答えを探すために、満州帰りの人々に対するオーラルヒストリーが重要となった。

満州に渡航するにあたって、その土地をどのような土地だと認識していたのか、渡航前にどのような材料を得て、どのようなイメージをかき立てていたのか、なぜ外地に渡ろうと考えたのか、抵抗感はなかったのか、そこにはどんな人々がいて、彼らとどのように接しつつ、どんな暮らしをすることになると考えていたのか、そうした事前の考え方は、実際に現地に渡った後どのように変化したのか、それとも変化しなかったのか？現地ではどのような暮らしが営まれ、その中で他民族はどのような形で登場してくるのか？

そうした内容の聞き取りを続けていく内に、彼らの証言に見られるある種の共通性が浮かび上がってきた。

「そんな…よく本や雑誌で言われるような、虐待とか、そんなひどいことは何一つなかったですよ。朝鮮人とは会社で共に仲良く働いていましたし、中国人のお店でもよく買い物をしましたが、いつもお互い笑顔で、ちゃんとお金も払って」

聞き取りの中で、他民族との接触について触れると、必ずといってよいほど飛び出すのはこうした弁明ともいえるような色彩のコメントである。

支配とか虐待とか、そういう言葉で植民地時代が全面的に語られているという現実、それと

自分が経験したこと、見聞きしていたこととの違和感、それを世代の違う私たちに分かって欲しいという思い。これはもうほぼ聞き取りをさせて頂いた全員に共通すると言っても過言ではない。最初はあまりにそれが弁明に聞こえ、違和感を覚えずにはいられなかったのであるが、次第にこれこそがこの人々の中で共有されている他民族観であることが伝わってきた<sup>6)</sup>。

もちろん一人一人によって話される内容は違う。例えば M.S. さんの場合、満鉄に勤務する夫と共に満州に渡り、吉林省白城市という地方都市の満鉄日本人官舎で暮らしたために、基本的に他民族と交わることはほとんどなく、他民族の多くは買い物に出た際、その商店主として登場したり、外食時に食堂の関係者として登場したりするくらいの間柄であるから、当然彼らとの接触は希薄なものであり、おたがいの生活空間に踏み込んだ接触はほとんどなかった<sup>7)</sup>。

しかし満州・朝鮮国境の貿易港羅津で物流の仕事をしていた K.N. さんの場合、職場で多くの満州人、朝鮮人が雇用されていたこともあって、彼らとかなり深い人間関係を結んでいたようである。職場のバレーボールチームで朝鮮人の職員とチームメートになり、全満競技会を目指して頑張った話など、彼らとの良き思い出がたくさんに語られ、尽きることがなかった。しかし彼らの日常生活について訪ねると、「それは知らないなあ」ということになる。つまりここでも職業空間と生活空間の切り離しという事実が浮かび上がる。

大連で貿易の仕事をしていた M.O. さんの場合、取引先の中国人の自宅に正月祝いに招待された経験を持つため、少しここで取り上げてみたい。その日長安街の中国人街へ馬車で向かった O 氏は、相手方のご主人に大歓迎され、豪華な食事とお土産でもてなされたという。最後は全員で当時流行していた「支那の夜」を全員で日本語、中国語交互に歌って散会したとのことだが、これはあくまで「晴れの日」の特別なエピソードであって、日常の話ではない。

こうした一連のエピソードからは、日本人が限定された空間の中で生活をしていて、中国人や朝鮮人などの生活実態を知る機会がほとんど与えられていなかったこと、その中で仕事や買い物など、すでにお互いの関係性が明確にできあがっている場所でのみ接触が行われ、そうした関係性の中でのつきあいであるから、そこでトラブルが生じることはほぼなく、良き思い出だけが形成されていた、という状況が浮かび上がる。

したがって、エピソードが敗戦時の混乱に及んだ際にも、「〇〇（中国人の名前）にはいつも良くしてやっていたから、あの大変な時期に助けてくれ…」という内容の話がたくさん登場してくる。大連近郊で果樹園を経営していた A. K. さんの場合も、敗戦と共に同じような経営を行っていた友人のところはすべて使用人たちに土地・建物を奪われ、殺された人もいたのに、自分のところはずっと従業員に良くしていたから、安全に逃げられるよう協力してくれたという話が登場、また先にあげた M. S. さんの場合には、夫が職場で可愛がっていた中国人の部下が、自宅にかくまってくれたため、終戦後の混乱を逃れることが出来たという話が生々しく語られた<sup>8)</sup>。

この限定された空間の中で他民族と出会い、良い思い出だけが形成されていくというシステムは、とても心地よいものであったに違いない。それは自分たちの植民地支配の肯定にもつながり、みんながこれだけ幸せになっているのだから、日本がこの国を支配して本当に良かったという結論にもなりやすい<sup>9)</sup>。それだけに多くの人は、戦後次々と知らされる植民地支配の現実、それも残酷な事実を知り、本当にそんなことがあったのだろうかという戸惑いを禁じ得ない。

一方で、支配された側は、その間のもっとも良くない思い出をかき集めて後世に伝える。様々

なメディア、教育現場などを通じて、日本帝国主義の犯罪行為が徹底して糾弾され、それまでひょっとしたら日本人雇い主との間に生まれていたかも知れない心の通い合いの記憶を打ち消していく。結果として、先にあげた M.O. さんのような人が、センチメンタルジャーニーを行い、かつて親しかったはずの中国人と会った時に、相手が予想以上によそよそしくて、思い出が汚されてしまったように感じるという事態に至ってしまうのである。

さてここで取り上げた日本人の記憶には、何一つ偽りはない。彼らが中国人や朝鮮人と接する中で「何一つひどいことはしたことがない」「周囲でもそんな話は見聞きしたことがない」「いつもよくしてあげていたし、それが原因で助けてもくれた」「彼らとはきちんとした心の通い合いがあった」という記憶が生まれていったが、それぞれについては（多少の思い出美化はあるだろうが）、すべて真実であろう。だからこそ彼らは植民地支配をめぐる戦後の言説に違和感を抱き（場合によってはそれに抵抗さえ行う）、植民地支配を糾弾するための材料提供となるような聞き取りを徹底して拒み、仲間たちを全面的にかばう。そして記憶の中で何一つ悪いことをした覚えがないからこそ、彼らは胸を張ってセンチメンタルジャーニーを敢行することになる。

したがって問題の焦点は、こうした記憶を生産させるに至った「関係性がある程度限定された空間における、日本人と他民族の交流とその記憶」の解明にあり、そこを明らかにしていく研究・調査が不可欠である。もちろんこの小論でそれがすべて果たされるわけもなく、それは今後の大きな研究課題としてここで提起しておくにとどめたいが、少しでも植民地に作られた競馬場の事例からそうした構造実態を明らかにしてみたいというのが、本論執筆の主たる動機である。

## 2. 植民地競馬場という空間

従来の植民地研究において、競馬場を取り上げた研究がほとんど皆無であったがゆえに、そもそも植民地全域に競馬場があったという基本的事実すら知られていないように思われるが、日本帝国は自らの植民地ほぼすべてに（朝鮮、台湾、関東州、満州国、そして樺太にまで）競馬場を設置しており、そこではほとんど一年中を通じて競馬が開催され、馬券が発売されていた。

こうした植民地に於ける競馬場開設・運営は決して日本の専売特許というわけではなく、むしろ欧米—特にイギリス人が先行して、植民地政策の一環として世界中で展開していた。現在競馬場のある国の多くが、かつての大英帝国に所属し、イギリス人が持ち込んだ競馬という娯楽を現在も様々な形で享受している。

そういう意味で言えば、日本も——決して大英帝国に組み込まれたことはないとしても——そうしたルートをたどって競馬と出会う。横浜の居留地（まあ小さな植民地みたいなものだ）でイギリス人が始めた競馬、これが日本における競馬施行の発端となる。

しかしながらこれが日本社会に受容されていく過程は、モラル豊かな日本人らしく、実に禁欲的なものであった。馬券発売のギャンブル性は徹底して否定され、競馬はあくまで文化であるという大義名分（これはイギリスが掲げていたある種の論理であった）から、馬券の発売が禁止されたまま競馬が施行されたり、いざ発売するとしてもその配当上限を10倍に定めたり、一人当たりの購入枚数を制限したりされた。こうしてギャンブル性を極力抑えつつ、大衆のギャ

ンプル欲により支えられていた日本競馬は（矛盾しているようだが事実である）、やがて様々な理由により植民地へ展開し始めるのであるが、そのあたりについては別稿を書いているので参照されたい<sup>10)</sup>。

面白いのは関東州に展開した時点までの植民地競馬は、日本国内における競馬とほぼ同一の形態を取ったということである。法的に内地の延長上にあった関東州では、配当10倍制限も購入枚数制限もしっかりと受け継がれていた。しかしやがて満州国が成立すると、内地とはまったく違った内容の満州国競馬法が作られ、馬券の配当上限撤廃、たとえば学生生徒未成年への馬券発売など、それまでとは一変した競馬が植民地空間で展開していくことになる。

こうして「満州」全域に展開した競馬場という空間において、日本人と他民族はどのような関係性を形成することになるのか。以下検討していきたい。

まず最初に、民族別に見た競馬との関わり方について、簡単に整理しておこう。

日本人にとって、競馬という娯楽は、植民地における数少ない楽しみの中でも大きな役割を果たしていた。国内においてはとかく賭博として白眼視されることの多い競馬であったが、満州では馬産振興・馬匹改良の中核を担うという位置づけで競馬が社会的に認知されており、競馬場で遊ぶことは国策の推進につながるとして推奨されていた。そのため先ず第一に国内よりもはるかに気楽に遊びにいくことができ、家族連れやカップルも少なくなかった<sup>11)</sup>。これは当該期の国内競馬と比べた大きな違いであった。社会的にきちんと認知されたレジャー施設として、競馬場は実に多くの観客を集めることができ、ラジオ放送での実況中継も行われるほどであった。第二に植民地では他のギャンブルが公式には行われていなかったため<sup>12)</sup>、人々は一攫千金の夢を求めてこの空間に集まった。国内では最高倍率は10倍までとされ、馬券の発売枚数も制限されていたが、法体系の異なる満州ではそうした制限が撤廃されていたため、5円券が1,000円以上の配当に化けることが決して少なくなかった。さらに次の満州人のところで述べる搖彩票などの存在もあり、人々の射幸心を煽るシステムは実に充実していた。ストレスの多い植民地空間において、刺激系娯楽（酒と賭博と風俗産業）がいかに重要であったかという点については、たとえばイギリス帝国植民地を題材とした諸研究においても明らかにされている<sup>13)</sup>。ただこうした娯楽はともすれば社会的に糾弾されることが多く、他人に隠れてこそと遊びに行くような暗黒の娯楽場であることが通例だったのに対して、満州国の場合は上にあげたような理由により、競馬場をそうした闇の世界から解放放ってしまっていた。

こうした社会的認知は、競馬場を取り巻く言説を劇的に変化させる。競馬雑誌『趣味之競馬』では、次のような言説が繰り返し掲載されて、人々を競馬場へと誘う<sup>14)</sup>。

元来競馬は不真面目なものではなく、競馬そのものの全部が国策の事業であり、国家として血となり肉となるものであるから、ファンとしても遠慮することなく、大に頑張って後援して貰いたいものである。

中には時局柄競馬は遠慮すべきだなんて極論する人もあるが、そんな人は競馬の何物かも知らない人である。他の娯楽物こそ遠慮すべきで、却つて競馬は奨励すべきものであることを銘記して貰いたいのである

こうした言説により、社会的地位を著しく向上させた競馬場は、刺激的娯楽の中では唯一「表」の存在として君臨した。このことにより、著しくお客を奪われた新京カフェー組合は、満州国当局に対して競馬の流行を押さえて欲しいという上申を行ったが、風俗営業同然の輩が何をおこがましいと、逆に非難を浴びる結果となる。

それでは満州人にとっての競馬はどんな意味を持ったのであろうか。関東州の管内には、地方競馬にあたる金州競馬、新義州競馬があり、この両者は連合で競馬開催を繰り返していたのだが、この競馬場に関しては、日本人よりも満州人の方が入場者が多いというデータがある。通常満州競馬においては、日本人と満州人がだいたい半々であり、あと中国人（漢人）や、朝鮮人、そして白系露西亜人などがいたのであるが<sup>15)</sup>、金州周辺は満州きっての馬産地であり、関東州種馬所もここにおかれていた上、こうした馬産を手がけている人の多くが満州人だったため、当然競馬場に出かける人も満州人が多数を占めることとなった<sup>16)</sup>。

そもそも満州は「南船北馬」といわれるように古来から馬を主要な労働力、運輸力として地域経済が構成されてきたため、馬の出来に關しての目はある意味日本人より肥えているところがあり、競馬という娯楽に關しても上手に適応していたようである。

ところがこれにくらべると中国人は、ギャンブル熱そのものに関してはひょっとすると世界一ではないかと思わされるくらいであるが<sup>17)</sup>、こと競馬というジャンルのギャンブルには手を染めたことがないせいか（それとこれは言い過ぎかも知れないが、中国人は全体に丁か半かといった分かりやすいギャンブルを好み、複雑なファクターを検討していく競馬のようなギャンブルは苦手とされているように思われる。逆に日本人はこうしたジャンルをことのほか好む人が多い）、競馬開催当初はそれほど中国人ファンの数は多くなかったようである。しかし搖彩票の開發により、情況は激変する。

搖彩票とは、正式には景品付き入場券と呼ばれ、競馬場以外でも市販されている宝くじのようなものである。すべての票に番号が付いており、その日の宝くじ用指定レースに出走するどれかの馬に機械的に振り分けられている。そしてその日の指定レースで一着になった馬に振り分けられた票の中からさらに抽籤で一枚が選ばれる。その番号を持っているものが当たりとなり、大きな規模の搖彩票（通称大ガラ）になると1枚2円の票が4万円になったりする。これは中国人のギャンブル欲を刺激するに十分な金額であり、これが発売されて以来はつきりと中国人の来場者数が増加し、それに連れて通常の馬券にも手を染めるようになっていったという。このあたり競馬場側の作戦勝ちである。

かくして満州人、中国人は、次第に日本人と同じくらいの入場者数を記録するようになる。

最後に白系露西亜人についてである。「その日その日を次から次へと楽しく送って明日のことを考へぬ白系ロシア人」<sup>18)</sup>という評判のある彼らにとって、夏の競馬は最高の娯楽の一つであったらしい。競馬場には多くの露西亜人の姿が見られた。特に哈爾濱賽馬においては、白系露西亜人の得意とする繫駕競走（トロットレース）が開催の半数を占め、その騎手のほとんどが白系露西亜人だったこともあって、同民族の競馬熱は盛んだった。競馬場には美しく着飾った露西亜人の女性が大挙して集まり、それがまた哈爾濱競馬の異国情緒を高めているとされていた。また騎手としての白系露西亜人はさすがはコザックの末裔だけあって、実に馬の御し方が巧みで、人気薄の馬を次々と一着に持ってくることから、「穴を狙ふなら露西亜人」といわれるくら

い信頼性が高かった。ちなみに昭和12年の哈爾濱競馬に登録している騎手は、日本人16人、満州人7人、露西亜人23人（内女性騎手2名）と露西亜人が一番多数を占めている。

こうして関わり方こそ微妙に違うものの、多くの民族の人々が競馬場という空間に集うこととなる。

イギリスの各植民地における競馬場では、現地人とイギリス人との席は完全にセパレートされ、両者が不用意に接触することのないような設備となっているが<sup>19)</sup>、「五族共和」をスローガンとして掲げる満州国の場合、そういう区別が一切なく、人々は空間を共有しながら、競馬という娯楽に打ち込んだ。

一般に「五族共和」というスローガンについては、あくまで建前であって、それが実態として意味を持っていなかったとする指摘もあるが<sup>20)</sup>、こと競馬に関しては、それぞれの民族が一堂に会し、出走馬が一着を得ることを目指して技術の粋を尽くし、そして馬券ファンは自らが購入した馬券が的中することを目指して知力を振り絞るという、ニュートラルな戦いが演じられ、それは十分に「五族共和」と呼べる空間であった。

こうした空間はそれぞれの民族の人々が営む日常生活とはまったく切り離され、それがゆえに一見対等な関係性が形成されていた。競馬は、その場集った人々が賭けた金額の総額から、主催者が一定の控除を行い、その残りが配当としての的中者に払い戻されるというゲームであるため、究極のところそこにいるすべての人々がライバルと言えればライバルなのであるが、誰がどの馬券を購入しているのかがわかりにくく、具体的なライバルの顔が見えないことから、客同士が比較的トラブルにならないという特性がある。満州競馬における「五族共和」もニュートラル性も、そうした競馬の特性が担保していたと考えられることも出来るが、ともかく人々は生活空間とは切り離された特殊な空間に集い、競馬という娯楽を共に享受し、個々の勝ち負けはあるものの、楽しかった思い出だけを胸にそれぞれの空間の中に戻っていく。ここでは支配している側も支配されている側も、そのことについて深く考える必要も機会もなく、ただただ多くの人々がストレスを解消しつつ楽しい思い出を形成し、主催者に巨額の控除金をもたらすという、主催者にとってある意味で最高の植民地支配のための装置として機能したのである。この装置は植民地支配を通じてそれぞれの民族が抱えた根本的な矛盾から一時的に目をそらさせてくれ、またその痛みや立場の違いを一時的に忘れさせてくれる装置でもあった。

こうした装置が実は植民地空間には様々な形で配備され、巧妙な統治を支えていたのではないかという仮説を筆者は抱いているが、それについてはまたの機会に論じることとしたい。

それでは次にこうした空間において、日本人は他民族とどのような人間関係を築いていたのか、当時満州において執筆された外地小説を題材にひもといてみたい。

### 3. 外地小説に登場する競馬場

郡司次郎正『ハルビン女』は、ハルビンを旅行で訪れた「私」を主人公に、様々なハルビンの風俗や女性との交わりについて執筆された小説である<sup>21)</sup>。この中では「私」とハルビンに住む白系露西亜人たちとの華やかな交流や遊興が描かれており、あくまで創作ではあるもののその風景描写は当該期のハルビンを研究するための歴史史料として貴重な存在である。一般にこ



こうした植民地在住の日本人作家によって執筆された小説群（これを「外地文学」といい、文学研究の世界ではかなり研究対象として重視されている）について、歴史学者はあまり史料として用いない傾向があるが、当時実際に現地で生活していた作者たちが描く作品群は、当該期の在外日本人の持つ意識や感覚をかなり正確に伝えており、史料批判を加えさえすれば、十分に歴史史料としての利用価値があると思われる。今回取り上げる『ハルビン女』は、新聞や雑誌などではわからない、生々しい空間描写や心理描写が繰り広げられており、競馬場という空間における日本人と他民族との関わりの在り方を、通常歴史史料よりはるかに的確に描き出している。

その一節「競馬場で拾った女」では競馬場という空間における日本人と露西亞人との関係性について実に面白い描写を行っている。

夏の間、松花江やそこに浮かぶリゾート太陽島で、「ハルビンに処女なしいふ例に洩れない、徹底した遊び好き」のロシア人女性たちと遊び続けた「私」は、夏の終わりを迎えたある日、虚無感に充ち満ちて、何か面白いことはないかと街に繰り出す。そこで出会った青年音楽家かつ女遊びの名手アレキサンドル君に誘われて、「私」は新市街の馬家溝にある競馬場へと向かう<sup>22)</sup>。

一弗を投じて、入場する。もう場内は、ロシア人と支那人入り乱れて、ごつたがえしている。

一弗の席は、自由席で、立見である。二弗の席の美しさは大変なものだ。

競馬場が、一種の社交場と化している。

賭けをする馬券売場の下は、女学生風のロシア女、大学生風の支那人まで、まじつて大騒ぎである。

こうした中、「私」はアレキサンドル君から、二人の少女を紹介して貰う。一人はアレキサンドルの知り合いで21歳の未亡人ヘレナ。金持ちの夫の遺産で豪華に遊びまくっている女性。もう一人はその友人でタマーラ。かつては金持ちの令嬢だったが父が仕事を失い、今は貧困に陥っている美女。ヘレナに強いコンプレックスを抱いているという設定である。

ヘレナはこの日3万弗の搖彩票を目当てに来場、ザフトラという馬に賭けていた。タマーラは「どうせ、競馬の馬なんて、あいすつぽなんだもん」という理由で、幼なじみの騎手が騎乗するシボニヤに賭けて、ヘレナの顔を明かそうとする。

そのメイン競走の前にまず、女性騎手戦の決勝が行われる。タマーラの友人であるニーナがそれに出ると聞いて、「私」はタマーラに「君、お金を貸して上げやう。賭けてごらん」と言う。「あら、さう、じゃ、貸して」といい、10円を持って馬券を買うタマーラ。

ロシアのみじめな浮浪の少年達が競馬場のあつちこつちをうろうろとしている。

支那の巡査がやつたらめつたらにわめき立てて、ゴールを中心にざわめいている観衆をどなりつけている。

支那芸者の望遠鏡がサアツと一斉に向けられると、スタートには女騎手を乗せた大きな馬が脚をそろへている。

支那の紳商がカメラを向ける時、馬は最後のスタートを切る準備をした。

「楽隊！」

ロシアワルツ！

沈まりかえる群衆！

突然鐘が、カンカンと鳴された。

ドオツといふ蹄の音と砂陣の中から疾風のやうに走り出す四頭の決勝戦の馬。

その大きな馬の背に鬣りついて赤、青、黄、紫の女騎手の背中と鞭！

タマーラは「ニーナは屹度勝つわ」と言い、そうしたら「四百弗が私のものとなるのよ。私は貴方に十円を返したら、その後で、私は宝石を買って衣装を買って、残金で滅茶苦茶に遊んでしまふ」<sup>23)</sup> というが、まあ当然のように負ける。

そして最終の三万弗競技が始まるが…。

最後の決勝戦の三万弗競技は始められた。しかしそれは、タマーラにもヘレナにも幸運をもたらさなかつた。

タマーラはうすいガルボのやうな唇を噛みしめながら僕を、ひつぱつた。

「何処へ行くんだ！」

「ホテル！」

「どうして？」

「だつて、私、貴方に十円の借りがあるんだもの」

ここでこの短編は終わる。

もちろんこれは小説であるのだが、ハルビン競馬において、女性騎手戦が目玉の一つとなっていたこと<sup>24)</sup>、搖彩票の配当が当時の水準とほぼ合っていることなどから、かなり精度の高い描写が行われていたと考えて良い。

この一節から、ハルビン競馬が、日本人、満州人、露西亜人入り乱れての「五族共和」空間を形成していたこと、日本人の「私」にとって、「ロシアのみじめな浮浪の少年」も「支那の紳商」も単なる風景に過ぎなかつたことがわかる。

出会ったばかりの若い白系ロシア人女性は、「私」からお金を借りて利那的に競馬に興じ、その後貸したお金の代償としてホテルに行き、そのまま二度とこの小説には登場しない。

そして「私」は楽しかった思い出だけを胸に、旅を続ける、というシュールな仕立てになっており、競馬場という空間、競馬という娯楽の持つ性格をかなり上手に浮かび上がらせている作品であるという評価が与えられる。

## おわりに

郡司が小説の中で描き出した光景から、満州において競馬場という空間に、かくも多くの人々が民族の垣根を越えて集まり、しかし、かくも希薄な人間関係しか形成しなかつたことが読み取れる。

競馬場は満州国のスローガンである「五族共和」を具現化する装置であり、一種の社交空間でもあったが、そこに集う各民族の人々はこうした刹那的な人間関係を形成するだけで、ただただ競馬という娯楽のもたらすスリルと興奮に身を任せ、ひと時を過ごしていた。そうした人々の投じる金銭は、競馬場を経営する日本人サイドにとっての巨利となり、そうでなくても財源の少ない植民地財政を潤す。しかも人々は普段の生活の中で抱えたストレス（その中には日本による支配によって生み出されたものが少なくない）を競馬で解消させ、次の馬券代を作るため、不本意ではあっても植民地空間の中で与えられた自らの仕事に熱心に取り組もうとするという構造であったことが、小説とは言え、郡司の残した文章を分析することで見えてくる。

日本の植民地経営にとって、こうした空間がいかに便利、かつ素晴らしい支配装置として機能したかは、想像するにあまりある。もちろん本稿ではこうした支配装置としての競馬場の存在意義については、その一側面を明らかにしたにすぎない。その全容解明については稿を改めて論じたいと考えている。

あくまで現時点では推定に過ぎないが、植民地において日本人が他民族と接する空間の多くが、このような性格を持っていたのではないか。厳然とした差別と支配を大前提としながらも、部分、局面ごとには一見平等な人間関係が日本人と他民族との間には用意されていた。そうした空間における様々な経験を通じて、日本人の心の中に良き思い出のみが形成されていったのだとしたら、センチメンタルジャーニー問題が生まれた理由もまた納得できるように思われるのである。

## 注

- 1) 現地在住の友人（中国人）に言わせると、あれほど設備が古く、ほろほろでそれなのにさして値段が安いわけでもないホテルに泊まろうとする日本人の気が知れない、ということになる。実際、私が宿泊した大連の旧大和ホテルでは、お風呂にお湯を入れようと蛇口をひねった瞬間に、赤茶色の鉄さびを大量に含んだお湯がどっと噴き出してきて焦った。こうした分野のプロフェッショナルではない私が考えても、水回りの設備が老朽化し、限界に達していること以外に、その理由が見つからない。
- 2) もしあなたが過去に誰かのことを物凄く深く傷つけてしまい、それが元でその人の人生までが変わってしまったことがあったとしよう。その場合、あなたにとって現在その人が暮らしている街は、とても立ち入れないような聖域となるのではないか（かつてこうした心情を歌った「五番街のマリー」という名曲があった）。たとえその街がどんなに思い出深い街だったとしても、自分が傷つけた人がそこに生きて暮らしている限り、なかなか訪ねていこうとは思えないものである。自分が傷つけたという思いが薄いのか、ないしは傷つけられた人が今もそこに暮らしていることに気が付かない、ないしは目に入らない、のでなければ。
- 3) 本稿で「満州」という用語を用いる際には、「満州国」および「関東州」を指すものとする。確かにその両者の間には国境があったが、本稿が対象とする、戦前期に「満州」に在住されていた人々の間で、そうした国境の存在を意識している人はほとんどいなかったと考えられる。したがってあえて深い意味を込めて、一括りの用語設定を行う。
- 4) 日本国内の競馬においては、1936年に斉藤澄子が騎手免許の取得に成功しているが、女性騎手に対する人々の猛反発から、実際の騎乗機会是与えられなかった（なお吉永みち子の小説『繫がれた夢』の主人公藤村くみは、斉藤がモデルといわれている）。
- 5) 満州の『競馬ブック』ともいべき存在の総合競馬雑誌『趣味之競馬』（日本中央競馬会図書室所蔵）でも、「穴を狙ふなら露西亞人」と普通にその存在が予想の中に織り込まれている。もちろん結局のと

- ころ競馬の最終的な目的は、自分が購入している馬券が的中するか否か、自分の出走させた馬が一着になるか否かであって、そのためには騎手が何人であるかはそれほど重視されないという特性があることも影響しているのであろう。重要なのは、何人であるかよりも、馬を追えるか、勝たせられるかであったと考えられる。
- 6) こうした思いが共通して強いため、「日本人による他民族への虐待、圧迫」などといった批判材料探しをするためなら一切インタビューには応じられない、協力したくないということを最初にことわられることもたびたびあった。
  - 7) 日本の経営する各植民地において、こうした生活空間の切り離しは徹底していた。日本人の居住する空間と、満州人・朝鮮人が暮らす空間とは、特に壁や網があったわけではないが、厳然として分けられていた。こうした日本人の生活空間、そこに暮らす人々の意識についての研究は、植民地研究の中でもっとも後れを取ってきた分野であるが、近年高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波新書、2002年）、塚瀬進『満州の日本人』（吉川弘文館、2004年）などの諸研究により少しずつ開拓されつつある。ちなみに以下の聞き取りについては、すべてイニシャルのみを記載した。
  - 8) ちなみにAさんの夫は終戦直前に招集され、従軍。その際その部下に妻のことを頼んでおいたらしい。
  - 9) 当時の満州における小学校教育でも、こうした「みんなが幸せになれたのだから、日本が植民地化して本当に良かった」という趣旨の教育が行われていたという談話もある。
  - 10) 山崎有恒『満鉄付属地行政権の法的性格：関東軍の競馬場戦略を中心に』浅野豊美他編『植民地帝国 日本の法的展開』（信山社出版、2004年）、175-210頁。同「もう一つの首都圏と娯楽：植民地競馬場を中心に」奥須磨子他編『都市と娯楽』（日本経済評論社、2004年）、159-190頁。
  - 11) 満州国賽馬法では学生・生徒・未成年への馬券発売が積極的に推進されていたので、まさしく「家族連れ」で参加できる遊興だった。このような光景はまだ「鉄火場」的雰囲気が強かった内地の競馬場には見られなかった。日本国内の競馬場の歴史については、差し当たり、武市銀次郎『富国強馬』（1999年、講談社選書メチエ）を参照のこと。
  - 12) 正確を期すと、昭和10年代後半に軍用犬によるドッグレースが行われているが、それは例外と考えてよかろう。
  - 13) ロナルド・ハイアム『セクシュアリティの帝国』本田毅彦訳（柏書房、1998年）など。
  - 14) 「ゴールイン」『趣味之競馬』2巻8号（1937年）。
  - 15) 哈爾濱競馬は白系露西亞人の入場者が多い（『趣味之競馬』所収記事による）。
  - 16) 金州競馬に関しては「さすが馬産地の中心だけに地元満州人ファンの競馬熱は大したもの、草競馬的興味横溢、旅大からも続々とファンが殺到する見込みで前景気と人気を呼んでいる」といった記事が多数存在する（『満州日日新聞』昭和12年4月9日）。ある日のデータでは入場者数2,000名、内満州人1,200名となっている。
  - 17) たとえば現在マカオやソウルのカジノで戦う人は、中国人観光客が圧倒的多数を占めるが、「とにかく熱狂的に勝負にこだわる人が多く、他人の戦い方にもいろいろと注文をつけてくるので実にやりにくい」という私の友人M氏の談話もある。
  - 18) 郡司次郎正『ハルビン女』リバイバル「外地」文学選集第2巻（大空社、1998年）、327頁。
  - 19) ちなみにこうしたあり方は、返還直前の香港競馬に引き継がれていた。実地調査してきたが、外国人には特別のエリアがあり、まったく現地人とふれ合わないまま入退場できる仕組みとなっていて、日本の国内競馬になれた人間としては少し違和感を感じるほどであった。
  - 20) 山室信一『キメラ 満州国の肖像』（中公新書、1993年）。
  - 21) 前注18を参照。
  - 22) 同時代の歴史史料と比べると、こうした夏の間の露西亞人の遊び方も、ここに登場してくる競馬場の位置もほぼすべてノンフィクションであることがわかる。
  - 23) ちなみに当時のレートで3弗が1円。つまり配当額133円であるから、単勝約13.3倍の穴馬にタマー

## 植民地空間満州における日本人と他民族（山崎）

ラは10円を賭けたことになる。4頭立てで13倍ということはおそらく最低人気であり、まず来るとは思えない。

24) 後に大連で全満連合競馬会（グランプリ）が開催された時、ハルビンからは女性騎手が参戦して大きな話題となった。